

清風錄

大正十年六月下浣起筆

二

特別  
14  
1919  
337

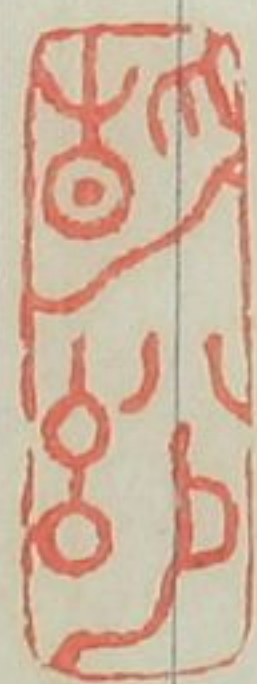


詩服録六

大正十年六月下浣起書



の長三河氏名印  
と云余の年と切玉  
架中の名家遺印  
加山  
款三云と明沈癸巳夫白氏刻



杖と白解々々々見由んま此心能ん

似て鼻且新也

初の三海自利と云々一が知らざる事  
と云々三海の家人の貴物  
と云々自利と云々北印後  
つとつと出の横画の海をみる事  
七以上の事と云々難し仍と難入  
こと云々

六月念日

又云架中の三海印講あり北印勝あり  
あるや云々三海出に往し探し  
あると云々今三海印講を授けし  
出すに難し其内捨出の事も勿  
すこと云々

口一巻身一獨逸の四時を説く、獨逸を講知の條  
件として云々巨額の用債金を徴せしめ、戦後  
國內夜禁の打ち、斯う大債金を拂ひ得るや否やと  
誰のも疑ふ事ある、是を獨逸の之を意のエルニ  
云々とも云々云々  
日清極端に巨大の軍費を費せし  
事あり、又マーソウの打ちひたき、修てきこめぬ  
世界列國人の獨逸に云々云々十数方を以て教  
え、此が獨逸人の獨逸に云々云々云々、此は  
云々云々文書の材料と云々、云々の云々獨逸四  
民之欲的やと云々云々云々、此は獨逸の  
あり、此が其の事、此の事、此の事、此の事、  
見ゆると、此の事、此の事、此の事、此の事、

前巻の四巻を敢て難きよあるかと、尤も用獨乙に  
し平視此親の二説あり、卷の語を又二説あり  
○二月廿五日、此の語を二出を得

高美其美并に門人の輯したる所  
纂印家送の稿本也

此首初文肉革の序文あり、これに依る  
其美此稿本と古木木米に異なり、木米七葉  
其美と親しむ刻と云ひしよ也、木米後み  
此の稿本と云ふに異なり、之高其の稿本と  
補し四巻を一冊に合せんとす、細長四三  
本本を八行十五字版下と見しく書は云と  
謹書あり、高美あり、鳥楳の輪二廓と

切り取り他の書多に丁寧と云りつけある  
こと、之高の序より、木米書に此稿を  
書と親しむ刻と云ふ、此の用字を刻に  
誤るゝ火中の墜し上層魚翅す許を  
あつ、これ高の補綴する所以也、其美  
木米と云ふ三人の字許を併して一種の骨  
と云ふ(キ)のり

○二月廿五日、雨哀書此一巻別と云、偶と一印  
と購ふ

印高 二冊

高美其美版

林雨蒼の跋

卷首：兩卷之關係又借軒記之借軒  
為一而共別稱 此書益田香齋之  
刊之各冊印記之 印文說十則卷首  
在 印文之高味也 右方：初

名號手記

- 欲界仙都
- 鳳泊鸞飄
- 十事亦糊塗
- 長劍倚天
- 苦惱眾生
- 血性男子
- 前沈後揚
- 蓮幕楚人杏林逸叟
- 卅卷秋雨後陰符
- 初無可樂誤為男
- 專氣一志萬物以存
- 直木不可以為輪
- 願作鴛鴦不羨仙
- 可不可然不然

- 以靈受人
- 名不可靈作
- 且從性所翫
- 後身名士前身佛
- 萬物一何小
- 殊在
- 學我者拙
- 辨香
- 心花意築
- 冷齋紅豆月
- 蓬花駐馬
- 多愁多病身
- 有進業無退切
- 志與秋天競可理與春泉爭
- 溢
- 岳不幽志不度
- 諧談掩拙故浪藏真
- 脚踏實地
- 艸香花媚可當嬌姬
- 得作才鬼勝於頑仙
- 笑古人之未忘已事之
- 已拙
- 書生見五十萬紙足了一世

○武市清晴の画幅と高くしきりてあり此人の  
筆致作風のいふべき所跡の味掬みてしむ  
も又誦すべし清晴九分の人武市地南の一  
家の人歟、此よりまゝを掲げてありあ、是れ  
云々

大山亭画梅あり七紙手記

先玄傳遊水向奇乾坤上は是等の疎林新と似て  
畫流氷集に杜比は無酒無春云々の是有琴  
有祝孝お題外節を錦江路湯の江山塔  
と書か

丁酉初夏上流偶あり於觀山と云保題

四七

○南の但宗部：却下書地の海列長とあり例の  
列り観る、珍雅一向、無し、古加精との集を撰ん  
んとて披おあり無し、と性、此と今とを之し  
三集の冊あり、四十五山の價ありとあり、はく  
たり、僅、左の雅とを辨ふ

諸ある即法帖

懐澤玉の 一紙

是れ零帖なりと名蓋の香近を記  
印記あり又香近の草の設けあり  
関史約書 一冊

史郎の二史地圖并に諸系を松本

愚山の無後刻しなすの寛政五年重印  
の版也

款数

一冊

森川外宮著する不巻首の奥面元  
巻の序より巻尾に五葉花中の後

列仙印玩

二冊

清人葉舟の以家に傳る列仙酒牌  
の印講より、列仙の名を刻し各  
日酒令を刻す、家系列仙酒牌し  
あつ併せしあお款の玩に供すし

○六月廿五日朝来梅雨深し陰翳付りし  
末の軒下を庭掃くまのりを通すうらな  
お出あやし本々の文末ををゆめて  
書舟清話(四冊)京都と得るん宣統年  
徳神の著す所、考決名に持て出史  
編よりこと解りし知、乃ち精ひ入ん、  
てんそく物路跡をて圓をを逸る、  
事一軌範一快を得、今う筆や一  
軌範をを七丈をうし、六佈の  
此出葉曆の刊本に係る、架守に  
比不可のるま也

○山の内伝後意より出版のありを  
甚心し

今度紙大マナ板改め和割体同幅糸と果荒樹  
 卷キリスタン板其未刊出んであつたを、一冊  
 複製成りて、和割体同幅糸とあつたを、一冊  
 複製成りて、中村庵の傳書に、版を一枚板に  
 紙一枚の摺り、彩色を帯びて、施し、果荒と  
 其の美を、所々し、複製成りて、於て、誠と  
 心大親接の複製成りて、解説を、左の如  
 せん、大親接の複製成りて、キリスタン版と七十  
 餘枚一冊のもの、その如く、首尾、板板を  
 コロタイ、版と、その如く、その複製成りて、  
 果荒と、

六月林公録

稀書複製會々報

第二期  
 第十二回

大正十年  
 六月

第十二回配布本解説

吉利支丹板こんてむつす・むんぢ

見本一冊(原 林若樹氏藏 木)

西暦一六一〇年我慶長十五年日本耶蘇會出版の「こんてむつす・むんぢ」(世を厭ふの意)とは彼の有名なるトーマス・ア・ケムビスの一四四一年の述作にかゝる Imitatione Christi をいふのである、又近年中山昌樹氏に依つて和譯された「耶蘇に倣ひて」と同書である。

本書は竪八寸八分、幅六寸三分五厘の美濃本であつて、内容は一冊の中を四卷に分ち、紙数は扉紙一枚、目録三枚、本文七十五枚合計七十九枚より成り

澁色の表紙を附してゐる、全部平假名混りの木活字板にして本文一頁約十七行に組み、新村博士の言はるゝ歐羅式系統に屬する細字木活を使用してゐる。

今フアクシミールとして書冊全體の圖一頁、扇紙表裏兩面一枚、目録一頁、第一卷本文最初の兩面一枚、第二卷々頭の二頁、最後の二頁以上紙數六葉を印刷に附して其髣髴を傳へるのである。

本書の原文は羅甸文に書かれ、歐洲に於ける最初の印行は一四七一年と言はれる、日本に於ての印行は本書の一六一〇年に先つこと十四年、一五九六年(慶長元年)に小本の和譯羅馬字綴本が發行されて、今英國牛津のポドレイヤン文庫に收藏される、其書は記載はないが活字の體より天草板と推定される、サトリー氏の日本耶蘇會刊行書志に引くところの此書



の羅馬綴文第一章を國字本に對校すると、僅に字句の相違があるのみで大體に於て同じである、思ふに國字本は慶長元年の天草板から校訂して國字に直したものであらう。而して羅甸文より翻譯したることは無論である。

日本に於ける吉利支丹板は一五九〇年(天正十八年)伴天連ワリニヤーニが西洋の活字並活字鑄造器械を携へ來り、翌天正十九年に肥前高來郡加津佐の學校に於て「サントスの御作業」を刊行したのに始り暫時にして其學校は天草に移り、其處に於て數種の出版をなし、後其學校の破壊せらるゝるに及んで、慶長三年長崎に移り、同處に於て又數種の刊行がある、從來、加津佐板、天草板、長崎板は世に知られて居るが此國字本「こんてむつす・むんぢ」の扉紙 *Mi aioxoffhina Faruda Antonii* 即「都の原田アントニヨの印刷所出版」とあるに依て初めて此書によりて京都板ある事を證せらるとは新村博士の説である。此國字本の出版はバジエーの書目にも推定されて

日本に存任するのは太平記抜書六卷(内野皎亭氏藏)と本書の二部のみである。

此書は越前の某舊家(此家には種々なる傳説あるも今は省略する)に耶蘇教の遺物數種と共に傳來したのを大正五年の暮と同七年の春の二回に互つて全部子の有に歸したものである。

大正十年六い下浣

林若吉記

二

居たが世に出たのはこれが最初である、サトー氏は其書志に「既に羅馬字綴和譯本の出版されたるを見ると新譯本の必要は無ささうにも思はれる」と多少其出版にも疑問を有つて居られるが、文獻を外にしても近年京都並高槻地方より發見された教徒の墓石六基の年號の慶長五年より同十五年に至るのから考察すると、慶長七年の關ヶ原戰爭より同十九年の大坂陣に至るの間は耶蘇教の禁令も緩びて再流行したことが傍證される、隨て教理を書いた國字本の必要が起つたので此書が再板されたのであらう、現在に於ては耶蘇會出版の書としてこれが最後のものである。

日本耶蘇會刊行の書多くは本邦より散逸し、却て歐洲の圖書館や愛書家等に保存されるものが多い、而して其刊行種類は二十數種に及ぶ、其内國字を以て記したるものは落葉集、サルワートル・ムンデ、ギヤ・ド・ベカドール・ドテリナ・キリシタン二種、太平記抜書並に此こんてむつす・むんぢの七種であつて、

て願す、若し乞ふ人あれば惜氣なく與へたりき。後

マ、ナ、イ、タ、版の名は、從來好事家の間に嘖々せられて、實物を見たる人は稀なり。今より四年以前、某浮世繪商店に組版の劇場中村座全景圖一軸あり、時價金五百圓と號したり。好事家垂涎措かず、争うて購はんとせしが、遂に某地の紳商の手に落ちたりと聞けり。

今回弊堂に於て複製せる本圖は、右と同一の組版、劇場中村座全景圖にして、原圖は夙に松廼舎文庫中の珍品たり。筆者は未詳なれども傑出したる浮世繪畫家の手に成れることは疑ひなく、明和年間(今より百五十餘年前)の刊行なることは蜀山人の添書きに依りて明かなり。幅二尺、長四尺に餘れる大木版を用ひて一枚摺りとなし、之に周到なる手彩色を施せり。

畫面は頗る周密にして、破風作りの舞臺、橋掛り、花道、假花道、羅漢臺、棧敷、鶉棧敷、土間、繪看板、大小名題看板、鼠木戸等を明細に描き、又之に配したる人物は、登場俳優(市川團十郎の將門、團藏の金時、八百藏の定光、辨藏の頼信、幸四郎の酒吞童子等)、觀客、木戸番、表藝者、場外の通行人等を合せて六百五十餘人に上れり。一幅の圖中に、此の如く劇場内外の委曲を盡したるは他に其例なかるべし、

本圖の複製は、彫刻、手摺り、着色、用紙の諸點に特別の苦心を凝らしたれば、原圖に比して毫も遜色なしと確信す。今回の複製は、其數僅に**一百幅**を限りたれば、好事家諸賢、何卒至急御注文ありたし。品切れとならぬ内に御申越を切望す。

(本圖には別に蜀山人の添書(玻璃版)及び本圖の解説(活版)を添附す)

明和劇場圖 中村座

此圖は木板畫中に於て最大のものとして推賞さる、まじりたん俎版といふものにして、幅は二尺、長さは四尺餘なり。明和年間に成れる手彩色の劇場全景圖なり。

何故に俎版と稱するか不分明なれども、五月幟の武者繪などに同様の例はあり。但し劇の畫、殊に劇場内外の全景を描きたる斯くの如き一枚摺は、古來名のみ好事家間に噴々せられて其實物の知られざりしを例とせり。數年以前某浮世繪商店に「東榮戲臺之圖」と題したる軸仕立の劇場全景畫一幅あり、時價金五百圓と號したり。好事家垂涎措かず、争つて購はんとせしが、遂に某地の紳商の手に落ちたりと聞けり。然るに我松廼舎文庫には夙に俎版二種あり。一は中村座の圖にして蜀山人の添書きあり。二は曲亭馬琴が舊藏に係る市村座の圖なり。共に「東榮戲臺之圖」と題して、畫風圖樣共に殆ど同様ながら、中央なる舞臺面の人物と木戸看板の文字は異なれり。實に珍中の珍なるもの。おそらく天下二三品ならん歟。曩に此市村座の圖のみを甚だ粗末なる石版摺にて複製せし人ありしが、著るしく寸法を縮め三枚の版面に分ちて唐紙に刷りたるものにて、雅致乏しく、原圖との隔たりの餘りに遠かりしを遺憾とせり。併しそれすらも今は知る人少し。弊堂茲に於て所藏者松廼舎主人の許諾を得て、兩圖中明かに傑れたりと思はる、中村座の分を原圖通りの大木版を以て複製すること、せり。而して特に手彩色其他に努力と工夫を凝し、幾多の苦心を経て漸く原版に比して遜色なしと自信し得るものを製出せり。

俎版に就いての細説及び筆者の誰たるかに關する考證等は之を他日に期し、爰には本圖の圖解のみを略記すべし。

原圖の箱書には「明和劇場圖」とありて、別紙に添へたる如き蜀山人自筆の添書きを畫幅面の上部に附記せり。即ち中村座の全景なり。此俎版に就いては、嘗て伊原青々園氏が「歌舞伎」第百三號に解説せられたれば、今其所に據りて説明せんに、舞臺は破風造りにして且つ橋掛りあるは、それが未だ能舞臺の形式を脱せざりし頃の構造なり。別に花道もあり、又左右の大石柱に、狂言の大名題と小名題の看板を掛けしも當時の風習なり。舞臺肯面の高所に在る見物席は當時「羅漢臺」と稱せられしものなるべく、囃子方の左の方の簾の中に在るなども、現今とは反對にて、京阪のそれと同じ。人物中、馬上なる團十郎の將門は「誓」の受けに當り、團藏の金時は押戻し、八百藏の定光は「誓」の役に當れり。馬の手綱を取る若衆形は辨藏の頼信、中央、緋の袴を着けしは幸四郎の酒吞童子、右の方の蛇體は三甫右衛門の山田の蛇なり。又土間は、花道の外に、右にも歩み板ありて、近代と異ならざれども、榊形なし。今の仕切榊は明和三年に繩張りとなり、同九年の新築に初めて方四尺五寸を一榊となせしなり。又左右に上下の棧敷あり、下棧敷に鴉籠の如く横格子の入りたるは、今もウヅラと云ふ名稱を残す起因たり。尙表看板の處を見るに、槽下の直下の繪看板は、俗に槽下と稱するもの、其左方に掲げあるは、淨瑠璃看板、大名題看板、小名題看板にして、大名題看板は位置も形も現今とは相違せり。又右の方に掲げあるは大詰看板にて、更に其右はワキ狂言の看板なり。又鼠木戸が左右に在るは近世に同じ。木戸の中央に巻き物を持つる男と聲を發し居る男は即ち木戸藝者なるべく、鼠木戸の右は東棧敷の入口、左の簾の上に在るは仕切場なるべし。

の梅雨打つとき梅雨防あめ時こめと出ると田舎を採  
る、こころいさや行きまじやう、まら得る所三四の  
程あり。

一 奥越の録 一冊

とん中山高跡の紀行より美濃紙  
真界百枚紙の言本、題名真高跡  
手書と云ふ、余ら案ずり高跡の  
集本あり、こゝ共に臨見す、  
此書は和紙九年二月廿九日とあるに  
うけし大災あり其の歎息を聞え  
とて行と感はらき十月廿日江尾  
こゝ書とぬる、全部偽名文也

此の冊中に山人の書か句と認めたる一巻  
ありあり、山人の書か句と認めたる一巻  
ありあり、山人の書か句と認めたる一巻  
ありあり、山人の書か句と認めたる一巻

うぶく人傳  
寫画帖

画帖、人物の、氣や宝と伝

佩帖

梅柳の、舟は海舟のうらみ

雑草

舟方も是きくさわし雑草

居後

舟心持のし居後の

かきし松

机櫃の二葉の道かきし松



(右は雑形仁尾の西際塚えとつ子塚  
草やまあり家代祭句師奴おのりとい  
ゆ又古海山見え内うかき所道中)

又古花く物多とりあきこ

阿波の道

又浪の阿波戸こそめを帆籠り

格ゆる

開帆や格ゆるいそよがくわく

の二句を執りし

一 天和武鑑

一冊

寛代ゆき綱吉公を冒して武鑑より形式古く、儒者の部を弘文院林春常、人見友元、外敷人と載す、後世習文の力

一と半井ト巻の名七見也、武鑑守稀記の七のとす

（六月林たる手録）

○例の月一分大隈侯の志前こひらく、  
人と共に侯の法論を聴く、  
ちとちと柳とを侯の法を専ら修め、  
す、  
の幕儀と並り、  
ること七侯とす

支候直大と直と、  
方最後の取柄とあり、  
あの人と祖宗

の直系は親族の子弟より多うつにみえり  
男子はお徳のしるふ者も多うと申すに  
まゝ、親族の實は浮山より八十七名も  
今も七章なる初敷丈も死亡者多し  
と申す、さるる紙の一欄を二箇あり  
直大の母(義母)の家齊の軍の女も  
徳の家も大い大切なる親族の告別式  
の日も田安の家も徳の家も  
御前へ参り、徳の家も  
云間に二時あり、居るに久米の  
大徳も七玄閣にまたるの、先般式に来る

或る千の人も此の二大家に最敬禮を施す  
の、さるるに、何んか毎夜御前に侍  
する親族その他親族も三三三、この  
皆る宿願あり、此の元夜に丈も  
大混雑あり、葬列を渡り儀仗兵七  
断り、休む身、陸海軍人、是  
死推測、死しと申す、納め、其  
此の人々、加つ、いん丈も、葬列  
と申す、各も、言へ、十二  
の自動車も、菜も、十二  
と申す、と申す、と申す、と申す、  
申す、と申す、と申す、と申す、

代表者を出し是れが野蠻なるとも旧録に二分樂  
を治めしし出さるる位り其治を容すこと  
るの如く林すむし葬儀に關する法も

直大は臨終の場を特々其の者の雅樂をせし  
人ことを即せん其の如く多し樂人を三冊の院  
習をも所枕邊に強しにことよつた大隈侯も  
音楽に沈味ある人を他の及能く働かざるを  
とる後七音樂を其の波動心ありう快感  
を興ふる好しし直大侯もいとよまに心  
れ是の如く先帝の如く其の如く直大侯を  
しし臨終を強しにせしめられたことありと  
の場面に思ひ出され常々此の如く一生の志業

ししと忘らんるる直大侯の特々野蠻な  
愉快に感ずんるものと思ひしことあり

侯と曰ふの臨終の場を強しにせしめられたことあり  
の葬儀を見らるるけふ二十年の間に關り  
お建時代の當めを何うか何んか記憶を  
いなし感懐することあり終にお建御方のこ  
とを西洋の如く根柢を異にするものか  
の柎柢もさうも推移しなすものか  
自えんるん、その如く其の如く神氣ありと云  
ぬ、さしよしく長くして根柢も異なり  
トウラヒとテモクウラヒし、その如く  
柎柢の如く此の如く行々の如くありと云





大坂と教とをよみ

六月廿九日記

追記 錦崎家今田義信様宛二十番の由  
休加らうとせりまじり式あり 禰の池寺会因し  
法要をよみ、人民の遷拜式とて六千餘人  
参り、北蕃のよみ出に雷響り本邸に報  
あり在左の如く 新設細河里由ボの法要その  
盛況をすてあつて大隈侯に向つて自命の  
田領地より斯の如きものありと云ひ候  
流石と申すも休加らう 眞前様を以て此の  
僻地なるものなる然れどもと云ふるは  
其をわつて挨拶するんがゆゑに直大侯  
の徳をあつたしなる事自らの現る事と云ふ

う

○北の文部省が國修の調査令をよみを設け委員を  
命じしに其の記名を多く委員と採つたことと無  
ことと知らるる其の決定案を得るや 調査の項目の  
と法尾の事も特記する何れも 此身禮法尾の乱脈  
と云ふと無し一定を要する事ありあや 此身  
の用済の盡くす事あり 連と云ふ語意を  
此身君達と云ふと傑達と云ふ 子供達と云ふ 此  
大なるまじり大連と云ふ事あるは天ふへき事ありや  
○早大の早大任助十月末に云ふこと次の早大同起  
り大隈邸に現る早大任助任助早大任助終  
身任助任助早大任助任助任助任助任助任助任助

巻集、大隈侯を以て次のまゝを以てすべしとの協議を定  
む、結局順序上先づ塩津を推し一年就任の上田中  
後継に譲るを穩妥とすともあり決し、本月より更々  
大隈帥に維持費全部を令し回致し、同く決す  
是れ等皆形式を踏み、最初より田宅に令し、  
以前より内部の別荘とす、最初より田宅に令し、  
御々各校の任を有し難きを以て任量の才あるもの  
を考へしとす、田中後継を考へて、内法を以て大  
隈侯考も塩津を先づ考へるを以て、順序ありと  
し、固持し、塩津も任考へ、振り考へ、田中、譲るの  
意なきを示し、久、金子(馬込)田中(流)の有人を以て、  
塩津に譲る不ありし、田中、譲るの難きを以て、

前に行悩の形とす、余の一の折衷案を提出し、先づ  
塩津を起し一年も考へ、田中、譲るの難きを以て、  
て順序を以し、且の任を以て、差支るの事、めんと主  
張し、久、塩津も條件付を以て、色あり、田中も  
一年を待つとの意思なきもの、如く、以て、余も  
譲る事張る無りし、其の維持費中の校友、田中、  
速場田、海老の四人を以て、各校給付時代、主として、  
と料理、其の關係上、起り、今田中の長口、題を決せ  
んと、先づ大隈侯考も、田中後継を起すの任を以  
上、已むを得ざる不以て、譲る、徳長も、田中、  
力説し、久、徳長も、四校友の言、其の所理ありとせし、  
早速一人の面會の折、久、賛成あり、久、後考あり

その固執して飽き塩津を主張し、これら以て  
早速との間十数年の間、海に信考を説く所あり  
津を兼夫七六側より早速を助け、信考を終に  
屈し、全然塩津を逐除して、塩津の面目より  
七信考より自易の面目より、その旨より、早速に  
對し一年方塩津をまて、然る上田中、及ぶべしと切  
り、此を以て、これに、これに、これに、これに、  
此間より、故本三郎、信考側、立つて、轉旋し、  
一筆、就任を約し、七塩津を乞つ、まると、  
田中も、これと、これと、これと、これと、  
病を移して、出勤せ、まると、三十の終、  
海に、これと、これと、これと、これと、  
信考の、これと、これと、これと、これと、

件につきを流すこと、さうも田中の思惑あり、  
さうも、早速との、早速との、早速との、  
生け、さうも、一、二、三、四、五、六、七、八、九、  
に、おと、得、す、と、説、き、ま、る、田、中、も、  
流し、塩、津、も、信、考、と、故、本、の、轉、旋、に、  
お、能、く、ま、り、こ、こ、ま、始、ま、る、内、定、を、  
田、中、の、形、が、塩、津、も、田、中、も、ま、故、  
七、の、あ、り、信、考、日、本、位、と、ま、る、田、中、  
い、も、津、を、之、を、ま、る、信、考、の、信、考、  
限、家、の、別、と、或、は、治、済、を、意、ま、る、  
津、と、一、時、強、く、信、考、の、面、目、を、  
以、て、塩、津、も、ま、る、ま、る、田、中、も、  
田、中、も、西、洋、と、

くへく、塩津一年のしと罷るる時をこゝ又西洋に赴り  
しとへし、別産塩津のみを時代には金を印し能くす、  
要を守るるも、塩津の任期程のきを彼自身の  
買傷を軽くする所なり、其の一年のしと譲る場合  
七塩津の雅量を出ひたる体なるまふを、謂ふは  
なり。

七月一日手録

○塩津のしと返りて文を興るとめするのあり、熟考を  
し、常道を傳ふる也者を設金ひその處一時も持て  
罷るるも、そのう宮あり低とさうて、其人を排斥せし  
氣を傳ふるあり、中村光庵を其一例にあり、或る権力  
のお産ひ心物を甘く出し、たとふ所あり、或る  
と設金ひその作、傑心ひありて、其作あり、人の花

は、播くとも、三流にまて、その心も、そのの排舞を  
と、そののたも、そのの紙を、そのの血を、そのの志を、  
そのの志を、そのの志を、そのの志を、そのの志を、

○偶々も、其の法と後を、初書に左の一品あり

張文襄之問書目各問附勸人刻也、説云、凡有  
力好書、其人若自揣德業、其問不足、其人而欲求  
不朽者、莫如刊布古書一法、其書終古不廢、  
則刻書者、其人終古不泯、如歙之龍興、其書南  
海之伍金山之錢、可決其五百年中、必不泯滅、豈  
不勝於自著書、自刻集、中且刻者、者傳先  
哲之精、蘊啟後子、之困、其亦利濟之先務、  
積善之雅淡也。

あつ三十年間刊行せしむる古本詳述ありしが  
自著を刊するに既ぬを、又裏の宛余の意を得  
以ての余唯此世を憂ふると云ふ小名を傳ふるの意  
ありしが、是れ又裏言ふ所と異なる耳

○前の北紙の終に載せんことを、東山と西澤に託せ  
ここの連載の長し命を草紙録せしめし時、家系  
の北紙雪嶺、何んか紛れ入りしや、早速に見ゆべき  
リし、今今えり出さるる前編三冊の天保六  
年秋の東山序あり後編と天保十一年の序  
あり四五年とあり後編の刊せんとすること見  
べし、後編の三冊ある下の巻二冊に合冊を  
あり、即ち前編七冊に、体裁後編の序あり

と同一の序ありと本文の附随して述べる村田の東  
山北紙漢文歴路を注せしこと也、流るる後編  
七材料量高しと興味前編とぬあるを、  
東山に附記し、漢文歴路中此の心あり紙巻を  
何れ見せざる一端とたたいあり、まじもの、東山  
新編寺の其巻もあらんと記し、紙こらり、  
深い甲の、鈴木物之の紙巻、  
十巻の序あり七江尾人、  
をえざる、  
魚を、  
紙巻に、  
し、

るるに在るありしに、千谷に清衣や一〇散策郊外に  
在る物を携きたる三人の目録に出合ふる相尋の女  
を拘りて初め其の面影を諦視せんや、其の  
美人らしきありき物さうさう、岩窟に集るるに  
紙美人多しと目録の世に就て云々、今岩窟を  
せんこそ此等の穢多の妻あり娘を中にも  
の葉（かたは）せまきものと笑ひんたること、岩窟に付んて地  
獄（じごく）の時中も千谷の藝妓、う接待を  
此美人を遊ばしむる如く、紙の女を乞ひたる者  
こゆ紙目録の藝妓、草鞋を穿たる一行とせ、徒  
歩の状態と見え珍しく感し、江戸を城  
後く下の谷中、三田嶺の茶屋より、秋・キナコと

うける水とすめんとあるき、千谷とらふ京山の  
漫遊中、紙の婦に解ひて、其の感し、千谷を  
る術の注中、ある、京あり、書し、雪中の圓の  
庭村、標榜を書き、千谷の心を、千谷の  
ちと、千谷のけさうと見え、其の西後を、圓の  
上、刻し、ある、あ、  
七月一日平記

京都全圖

一枚

元禄十二年 林氏吉永の名を刻し  
す、あるもの、長七尺丹緑  
の彩、七あり、今京都之、全圖の、尺  
七、大なるもの、京都を、火出、めく

市原に大なる麦(粟)ありと云ふ此田  
を名譽多かりに買ひよるを得し價三  
十田也

昭代昔の事

大なる股式者(在也)陸實  
田原 價二十五田

詩萬万株

皇廟万株に倣ふにゆりて七のめは  
功前の股えん寸本より七株は中  
に重くと得し

○此種被割るるに心りたるぬ和割坊園にのき好ゆる

違ふく、多分上方にて股りたるあらし、  
大字も刻しある東茶其甚なるの標記  
の如き何と云う上方より江戸の茶の葉を採り  
東茶と冠するやう思ひ、其甚を其甚  
との江戸に云ふはし、此の上方より股行せ  
んは其甚と其甚と云ふあり、高舞茶の  
背後の茶なり元分高舞茶なり杯後茶と  
云くぬ和の以上方より其甚と云ふは其甚  
や其甚なりと云ふは其甚と云ふは其甚  
中の茶は其甚なりと云ふは其甚と云ふは其甚  
と、梅の江戸の真行を用ひたる標記あり  
ハ一枚摺りあるもの大なる股、見物なり其甚



此の況或可なり  
 此の況或可なり

〇人口調査、就て流次大隈侯様より昔一之和久  
 口を調査し以てものを二百年十年後とも其の  
 人口を以て對照すべしハる昔人の増加するに  
 近年の著しく増加するに比する如くも處々  
 増加する、あつて國分と横濱と許さんか、各地  
 共に口数の増加を翻ハるのめりの厄難として隨胎  
 の風習を盛行ありしこと思ふべしと語る  
 〇佐州より丹郡山田藩に赴き居る公海八朝  
 り其事を爲めに例に況向を志す

五月雨や汗なすけふる馬の尻

〇大隈帥の雪跡(スノーボート)も有るもの  
 今までの前、傷々午後の雪を受け比念の  
 の如き  
 を受け  
 〇自分  
 と爪と  
 味のま  
 いけんも  
 物おと  
 名しは  
 を授し  
 〇あ、



百九千五万一第 (版十第) 子刊行本

評の徒果侯の  
塙美らう一書と

六月三日記

果物の王に  
舌鼓み

昨日限侯邸で  
第二回試食會  
一等はワセダ一  
今年で二回目のマスクメロン試  
食會が二日午後二時から早稻田  
大隈侯邸で開かれた庭の芝生に  
面した大広間の長い食卓の上に  
は約七七八七個何れも出来栄の

好いメロンが  
甘い香を吐いて居る  
審査の結果は一等が大隈家出品  
のワセダスノーポールで高さ三  
寸七分周り二尺三寸重さ二百五  
十匁のもの、父は米国育ちのホ  
ーネデキニー母は限侯前妻のワ  
セダ第一号であるとの事千正屋  
などから御褒美が大隈家へ出る  
二等は  
大隈家のものと池上  
の山本家の出品のもの、三等  
が鴨下氏、加藤氏、房州の安西

氏、平塚の戸越農園辺りからの  
出品である老侯爺も今日は取分  
け氣持のよさうな明るい顔で  
座敷に現して挨拶がある百名許  
りのお客様は新宿御苑農科大学  
女子大學、錦島農園を  
始め東京近郊農園の關係者等何  
れも此道の通人許り香氣を嗅い  
て見たり肌の色を吟味したり容  
易な事では口の中へ納まつて了  
はない十人許りの婦人客の中に  
は榎橋獅子刀自の姿も見えた  
(寫眞はメロンに露落ち大隈老侯)

〇十二部評菟美等々各程の寸本二冊の寸本三書目を鑑  
し、造つて得んが儘に添加し来りし最最早の向をなせ又  
部門に分るる故の半くえちを依りて他の部に加くするを  
あつて銘條を極め見ると便るるを、惣記を思ふお柄保  
寸本七冊を一帳にわらわすを清く、此のちとん

の用い来るものも更なるやう、寸本の目録を心  
のちとん(一)のちとん(二)のちとん(三)のちとん(四)のちとん(五)のちとん(六)のちとん(七)のちとん(八)のちとん(九)のちとん(十)のちとん(十一)のちとん(十二)のちとん(十三)のちとん(十四)のちとん(十五)のちとん(十六)のちとん(十七)のちとん(十八)のちとん(十九)のちとん(二十)のちとん(二十一)のちとん(二十二)のちとん(二十三)のちとん(二十四)のちとん(二十五)のちとん(二十六)のちとん(二十七)のちとん(二十八)のちとん(二十九)のちとん(三十)のちとん(三十一)のちとん(三十二)のちとん(三十三)のちとん(三十四)のちとん(三十五)のちとん(三十六)のちとん(三十七)のちとん(三十八)のちとん(三十九)のちとん(四十)のちとん(四十一)のちとん(四十二)のちとん(四十三)のちとん(四十四)のちとん(四十五)のちとん(四十六)のちとん(四十七)のちとん(四十八)のちとん(四十九)のちとん(五十)のちとん(五十一)のちとん(五十二)のちとん(五十三)のちとん(五十四)のちとん(五十五)のちとん(五十六)のちとん(五十七)のちとん(五十八)のちとん(五十九)のちとん(六十)のちとん(六十一)のちとん(六十二)のちとん(六十三)のちとん(六十四)のちとん(六十五)のちとん(六十六)のちとん(六十七)のちとん(六十八)のちとん(六十九)のちとん(七十)のちとん(七十一)のちとん(七十二)のちとん(七十三)のちとん(七十四)のちとん(七十五)のちとん(七十六)のちとん(七十七)のちとん(七十八)のちとん(七十九)のちとん(八十)のちとん(八十一)のちとん(八十二)のちとん(八十三)のちとん(八十四)のちとん(八十五)のちとん(八十六)のちとん(八十七)のちとん(八十八)のちとん(八十九)のちとん(九十)のちとん(九十一)のちとん(九十二)のちとん(九十三)のちとん(九十四)のちとん(九十五)のちとん(九十六)のちとん(九十七)のちとん(九十八)のちとん(九十九)のちとん(百)

六月四日記

〇某村の石三つを横拍と画し幅を高くし  
すまふものあり皆河波園の題詞あり、題詞を言ふ  
此の皆又取之様也豈其中有不獲也  
将睡之所謂路々者歟然則膏為某市不  
貴邪何以難胸中し石破塊邪将者一

此者有新心寄却、其能日渡之以斗酒都

急題

外、存同吳江の現本元墨山の一幅を示せる墨氣  
淋漓合括動く、此幅吳江紙のあまの字中丸  
筆の字を功を画する不為三首と稱す

刻筆帝来雷名新翠翠紫如沫淨無塵  
村之行落初乾便吟殿恰入拍出人茅屋  
家午景清閑吟徐信村行陰村老不煩  
風騰家部記隔羅啤教聲了乘秧雨  
足綠持齊未泥却各送蒼白西洗馬柳陰  
人漸散昔何深便如鷓啼

辛未夏四月廿二日同敬齋東窓

二兄風也初向術蟻 功高元甘方高干  
地花半當時雲雨初寄凡書の余人余  
上獲の二首偶敢當名去書畫因併  
録以贈之 吳江急

○津梁道彦、他及中身土作派の画家、こゝら  
面像、うらうら、いふ、ある、苦心七緒の具をあら  
見し、うらを先以うら、投宿を為す、あ、余、  
ま、九、二、貨、其人の、内、こ、名、を、出、し、だ、を、投、宿、の  
名、うら、も、臨、ま、さ、さ、し、か、り、換、持、の、名、あ、ま、り  
又、うら、うら、うら、うら、の、日、若、心、の、こ、も、語、ら、要、と、西  
岸、書、うら、うら、うら、うら、毛、也、うら、うら、も、書、うら、の、ま、い、海、

後の具よりして、度をもせざるものをも、種々研究の  
法を得たりと云、又此の西洋式の油漬の具も、種々  
画し、此のものを撰り、帯して用ふるものも、凡そ  
目を悪きものも、白毛の後の具も、これより、  
甚しうと云ふ、これより胡粉も、  
を、変化せんとす、彼の物の、  
その、飲料も、  
後の具より、  
此の、  
ハ、  
の、  
は、  
西、

の具の研究、  
と名の、  
津、  
し、  
于、  
を、  
由、  
こ、  
を、  
こ、  
と、  
古、

具の大なる其の用も甚だしく故に其の用も甚だしく  
一なる画の後の其の用も甚だしく一千年を往する  
代のものなりと其の用も甚だしく中々我ら  
後世の用も甚だしく画の後の其の用も甚だしく我ら  
の後の其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
ど、日本も其の用も甚だしく上代に其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
後の其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
何れも其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
受けることあり其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
入りける其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく

けはし日本も其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
田根と其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
古土佐の其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
と其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
三たり、其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
ハ或る其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
千年を往する其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
依ん、其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
と其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく

津端の其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく  
と其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく其の用も甚だしく

駿を其るの者の心に托せんといふ今の如きは  
 も頃をに柿と其の材を盡しとてその光珠の  
 のものや、白紙の具の用ひらざるを揚言は  
 心のこゝろと云ふ

大正十年七月二十日

〇山陰を越えたりして後傳世の如くは  
 山陰の山を歩くは功を成し世に名を  
 馳せたり其の後を歩くは自分の口を  
 文章に削りて世に名を馳せたり其の  
 加くして其の如くは功を成し世に名を  
 ひしは功を成し世に名を馳せたり

### 山陽の舊居「山紫水明處」

春城學人談

春城學人の談は、行の季節とし  
 ては固より佳なるも、早夏新緑  
 のころの旅も衣袂軽く程々の香  
 濃かに鄙人の詩を肥すもの  
 無しとせず。春城市馬先生に

頼龍三君

春城學人の談は、行の季節とし  
 ては固より佳なるも、早夏新緑  
 のころの旅も衣袂軽く程々の香  
 濃かに鄙人の詩を肥すもの  
 無しとせず。春城市馬先生に

欲してゐた所のものを始めて見た  
 時の感興、それを少しく語つてみ  
 たい。その外でもない、山陽  
 が不朽の文章を作り出したその  
 書齋、乃ち山陽の處として世  
 に名高き「山紫水明處」を訪ふた  
 云ふ其の過ぎないのである。  
 實は自分も京都へはしばしば復  
 せる者で、京都並にその附近、乃  
 ち洛東洛西に於ける名所蹟と云  
 ふ名所蹟は探訪し盡したと云  
 ても可なる位である。日山陽につ  
 いては幼時より一の趣味を持つて  
 居り、又山陽については比較的そ  
 の多くを知つてゐると人にも謂は  
 れ、或る範圍には自分を自するに  
 關東方面に於ける山陽通の一人者  
 であるなど、云ふ者もある位であ  
 るのに、この「山紫水明處」には  
 宿縁の薄いたためか、嘗てそれを訪  
 ふたことがなかつた。殊に「山紫水  
 明處」の所有者頼龍三君は頼支峰  
 の養子でこの人には自分も會つて  
 前の識があり、今より十年ばかり  
 前にはその居を訪ひ山陽の遺品を  
 見せて貰つたときへある關係を有  
 して居つて、この人に頼つて「山  
 紫水明處」を見るとは決して難事  
 ものではなかつた。

山陽の舊居「山紫水明處」

春城學人談

春水の遺品

支那の養子山紫水明處の所有... 春水の遺品... 春水が自ら... 春水が自ら... 春水が自ら...

山陽の舊居「山紫水明處」

春城學人談

一軒の茅屋

山紫水明處の庭に面せる所に... 春城學人談... 一軒の茅屋... 春城學人談... 春城學人談...

# 山陽の舊居『山紫水明處』

春城學人談

## 叡山と鴨川

書寫のどこに海濱、文瀾、詩翰などを置かれたのであるかさやうの設備は幾と見られぬ。されど全体的な建物は小なる縁側を隔て、直に鴨川の流に臨んでゐる。恰も鴨川の涯に突き出して造つたか、云ふやうな構造で、その縁側より出て欄干に倚る時は澄み切つたる鴨川の清流がその下を流れて居るのを見る。

昔山陽存命時代には鴨川も多分水量が多く、その川の中に洲なんかもなかつたであらうと思はれるが、今は中間に非常な幅の狭い洲が出来て、その洲の端に水流が狭く流れ、「山紫水明處」の欄干には狭い細い川が流れて居るかの如くになつてゐる。前面に當つて茫然と雲霧に捲かれて居る山は、山紫と山紫に水明かと云ふ對象の二なる山は乃ちこれだ。「山紫水明處」

に坐してこの山に對しこの川に臨む、山陽がかやうの名を附けたのは決して無理からぬとて、如何にも寫實的の名で、實景を描き出し得て、穿つてあることが知られる。只時勢の變化で、今は丁度球岸に目を遮る二の建物が建られて山紫に對しての眺望を破壊してしまつてゐる。其建物は云ふのは一は愛國婦人會の建、物一は京都教育會の會館で、孰も洋風のベニキ塗の二階建ての建物であるから、この天地的な自然の風景を凌駕したものたらしめて甚だ目障りとなつてゐる。この建物の背後に比叡山は萬古不易の雄姿を聳立せしめてゐるのである。それから許を右方に轉すれば、こゝには鴨川をこちらの岸より對岸に渡る極めて長い虹の如き橋梁が架けられてゐる。これが丸太橋だ。

只今この風景を見ただけでは餘り能く當る地區とも思はれぬが、今より四五十年前の昔、更なる山陽在世時代に遡つて四圍の山川風光を想像してみると、當時の風景その儘のものに、當時の浮世の試みに對するの障りとして來る。試みに對岸の障りとなつてゐる二三のベニキ塗の大建物を無にするに、鴨川も洲なんかを取除いて仕舞つて、玉の如き水の全江に流れて、又丸太橋と云ふ舊時を想像し、又丸太橋と云ふ舊も其名稱の如く、昔は決して今もやうな立派の橋ではなく、只丸太を渡して渡りに途を通したと云ふ、その又舊時に立ち戻つて丸太でも架せられてゐるものとして、この邊の景色を空に描き見ると云ふと、中叡の山は、よりはモリ少しく膝を多く現してゐるに違ひなく、又叡山の麓の鬱然たる樹木なども必ずや二種の雅趣を添えて居つたであらうし、鴨川球岸の田舎美、田舎美も亦その趣を助けたであらう。

山陽の語にこの對岸の杜に隠れた中に能く神遊がある、舊は鳥居があつて、その鳥居をこちから望んだものであるのとてあつた

# 山陽の舊居『山紫水明處』

春城學人談

## 二枚の額

二枚は海仙一枚は長動侯庭の一隅に懸ける意外の物を云ふのは、かなり大きな石を幾重ともなく積みあげて、餘り隙もない庭園に穴の如くに石で圍んだ一の岩窟やうの物が造られてあつたのがそれである。二段ばかり段を降りてその下へ行つてみると、下は眞ツ平で、その處さは僅に楕を二脚ならべてそこに對坐するとの出來る位の誠に狭いものであつた。而して穴の一隅には極めて浅い方形な力が掘られてゐる。そこは清水が湧き出ると見えて甚だ清冽なる水が溢えられて居る。或は三伏の暑さに堪えざるなどは、涼みかてらこの穴に入つて杯盤を置き一杯何けると云ふとも取て出來ないとはないやうだ。併しいくらか俗臭を帯べる方では、どうもこれ

て、先生方住んで居られた母家の方へ他の建たのを買取つてその處に經營したのであるとの事だ。母家の母家はその當分の建てはなく、その後に至つて更に建たされたのである。今二枚は、部屋間なども全く別と違つて居ると云ふので、この母家の方は他に在つて居る。現在にも使つてゐる。既に山陽在世當時に於ける現存の儘でないことすれば見る必要もないからこの方は、是れに終つた。

更に又話は一へ還る。書齋には二枚の額がかけて居る。孰も「山紫水明處」と題したものであるが、これは無論山陽當時の物ではない。恐らく先生在世當時にはかやうの文字を懸せるものは掲げなかつたらうと思はれる。果して然らうの語でも、一枚の額は山陽の幼時時代の朋友乃ち竹馬の友であつた海仙、或は河谷とも稱したの書いたものであつて、落款に安政四年七十三更海仙とある所から察すれば、山陽が歿し、後のとて蓋し想ふに海仙は、山陽とは遊び友達ではあつたが、頗る長壽を保つた方では、後に残つて來らへつたのを「山紫水明處」が一度安藤の手で移つた時、安藤が山陽のかけの者を物色して偶ま前前を捜し出してこの額を書いて貰つたものらしい。他の一枚の方の額は、これは、頼有、(三)が頼有主である云ふ。因から特に淺野長動侯に乞ふて書いて貰つたのであつた。淺野侯頼有の額には題識が書き添えられてあつた、それは頼有が四行ばかりのものであつたが寫し取る暇がなかつたので今は只記憶に存してゐるばかりである。その意味はかうであつた、この場所は山陽が日本外史を修めた處である、自分(淺野侯自ら)を指さして頼有と君臣の關係に寄る、その縁からしてこの額に揮毫すると、ざつとこんなことが記されてあつた。

袋戸には、玆たる竹が書かれてある。これが又海仙の書いたもので、これも多分山陽時代の物ではなく、安藤時代に、額と一緒に海仙に書かせたものであらう。まさか山陽が海仙等に書かせて、それを自分の額に掛けて珍重してゐるが如き事のあるやうな筈がないからな



山陽の舊居「山紫水明處」

六 頼家買戻し

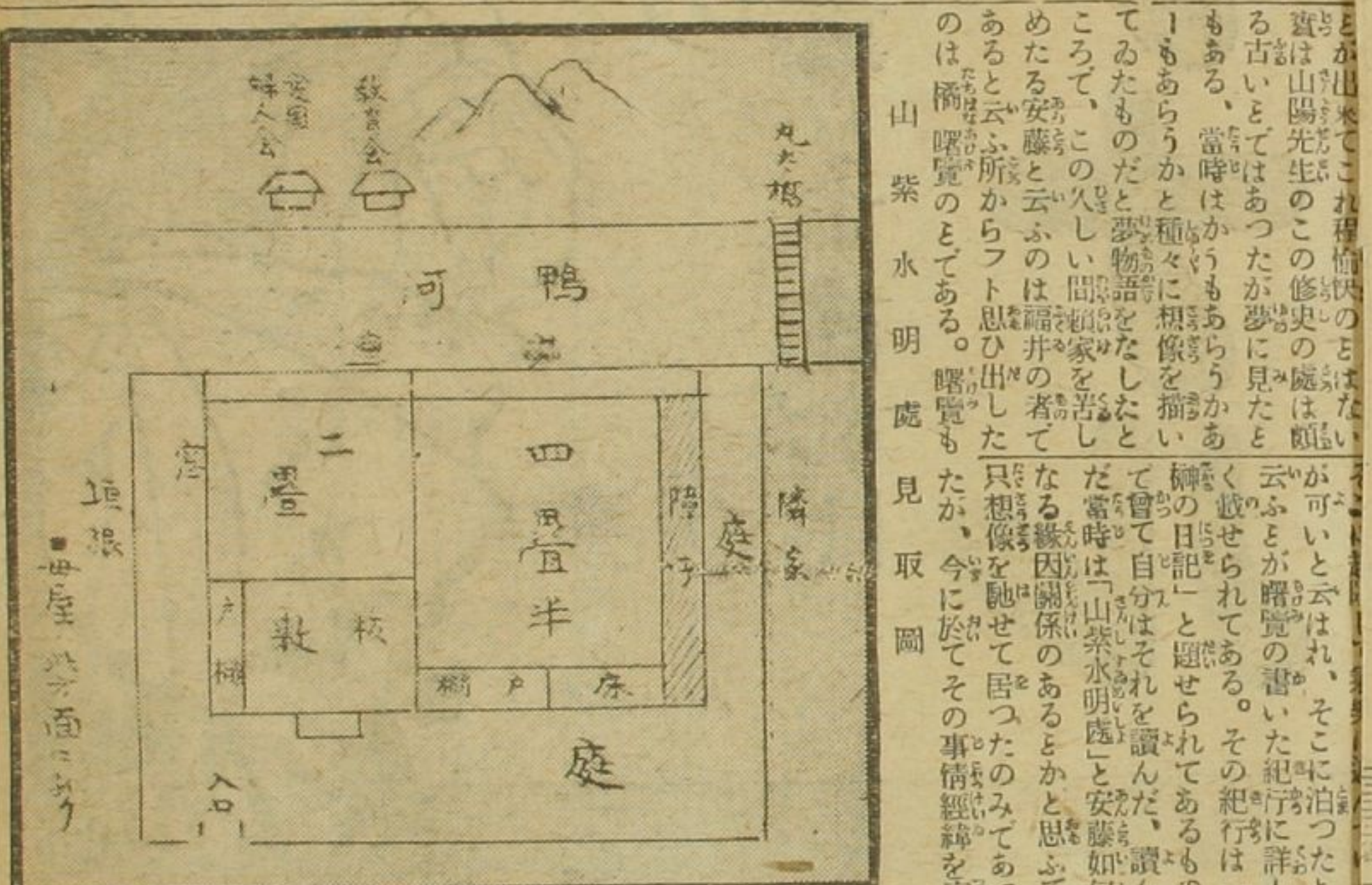
春城學人談

頼家買戻し 春城學人談
西村先生は山陽の舊居「山紫水明處」...

西村先生は山陽の舊居「山紫水明處」...
頼家買戻し... 春城學人談...

口物に

西村先生、富岡鐵齋、谷鐵臣と云ふが如き連中...



山紫水明處見取圖
西村先生は山陽の門人に教へて...

西村先生は山陽の門人に教へて...
頼家買戻し... 春城學人談...



# 山陽の舊居「山紫水明處」

春城學人談

## 支峰の日記

橋本賢が息子と共に藤月庵の所から提灯を借りて歸つた時のとてある。夜運くたつて歸つて来て見ると「山紫水明處」には鍵がかかつてゐて明かない。扉を籠めて明けやうとしても鍵がつかない。居ると見えて容易に明かない。色々苦心をした末隣家に話をしてそこから合鍵を借りて来てみたが明かない。そのうちに提灯の燈燭が消えかゝる。息子が焦つて力まかせに押してみると戸は既に朽ちてゐたので少しばかり破損れ、辛うじて人間の軀體の入る位の穴が明いたので、そこから親子二人は入る事が出来たと云ふやうな話を賢の日記に書いてある。

生等と互に酒を酌みかほした。ところが燈の用意を忘れたので、窓へ燈燭を懸して夜を更かし、さして寝やうとする頃になると燈燭も盡き果つたので闇中に衣を更へて褥に就いた。久しく空家になつてゐた爲でもあつたらうが夜無人に迫るが如く感ぜられて寝つきが悪い。その上断髪が頭巾の邊りを筒へまはるので、趣味の悪いと影し

自分の胸中結んで解けざる一の疑に師事たる影を持つてゐる。此等、頼君の語のうちにあつた地、こんな話に自分も興し、頼君も興感争ひをしたと云ふその隣家は、暗し、主客俱に打ら興じてゐるうち賢が合鍵を借り、隣家ではあるまいか、それとも違つてゐるかと思ふの一事であつた。かくて争ひになつた所は、だも指さるゝ所を見ると、手洗鉢の置かれてある方の一隅でそこには隣家の跡が建てられてあるが、評議落後遺却したのだと云ふと三四尺に込めたた。松迹が見えてゐる。欄木その他に上つても遺却の跡の新しいものが懸然と判つてゐた。而して評議を争つたこの隣家こそ、賢が合鍵を借りた隣家であるらしく思はれた。

賢の日記の「支峰」の言はるゝには、日記に云へば養父支峰の日記が今も尚存して保存されてゐる。その日記を讀んでゆくと越後へ行つた時のとて書いてあつて、賢が忘れられた市島姓のことが懸念されてあつた。もしやアナタのお宅のとてはあるまいか。自分で頼君のこの話を聞くと即座にそれは私の家であると答へた。當時賢は私を借却したるか如き感かせられた。はまた青年時代にはあつたか大人。(結)

〇〇〇早稲田出身の美術家十数人と「山紫水明處」の件とを評決す

- 一定款
- 一 会長、支峰を推す
- 一 支峰と余を顧問とする
- 一 十月十日に法会をす
- 一 会場を大隈邸とする
- 一 在場者の長らくして十日暮年
- 一 早稲田の修り、支峰の案内をす
- 一 法会に出席する名を各々をす
- 一 早稲田出身の美術家十数人と「山紫水明處」の件とを評決す

こころ

雲のしら

山田にてよめ

此漢長

陽のむら

此漢長

すゝ、ひよあ

わ、こころあ

節日

山田にてよめ  
うたのこころ

余は雨にまじりて

五月雨や 行かぬけり

永受嘉福

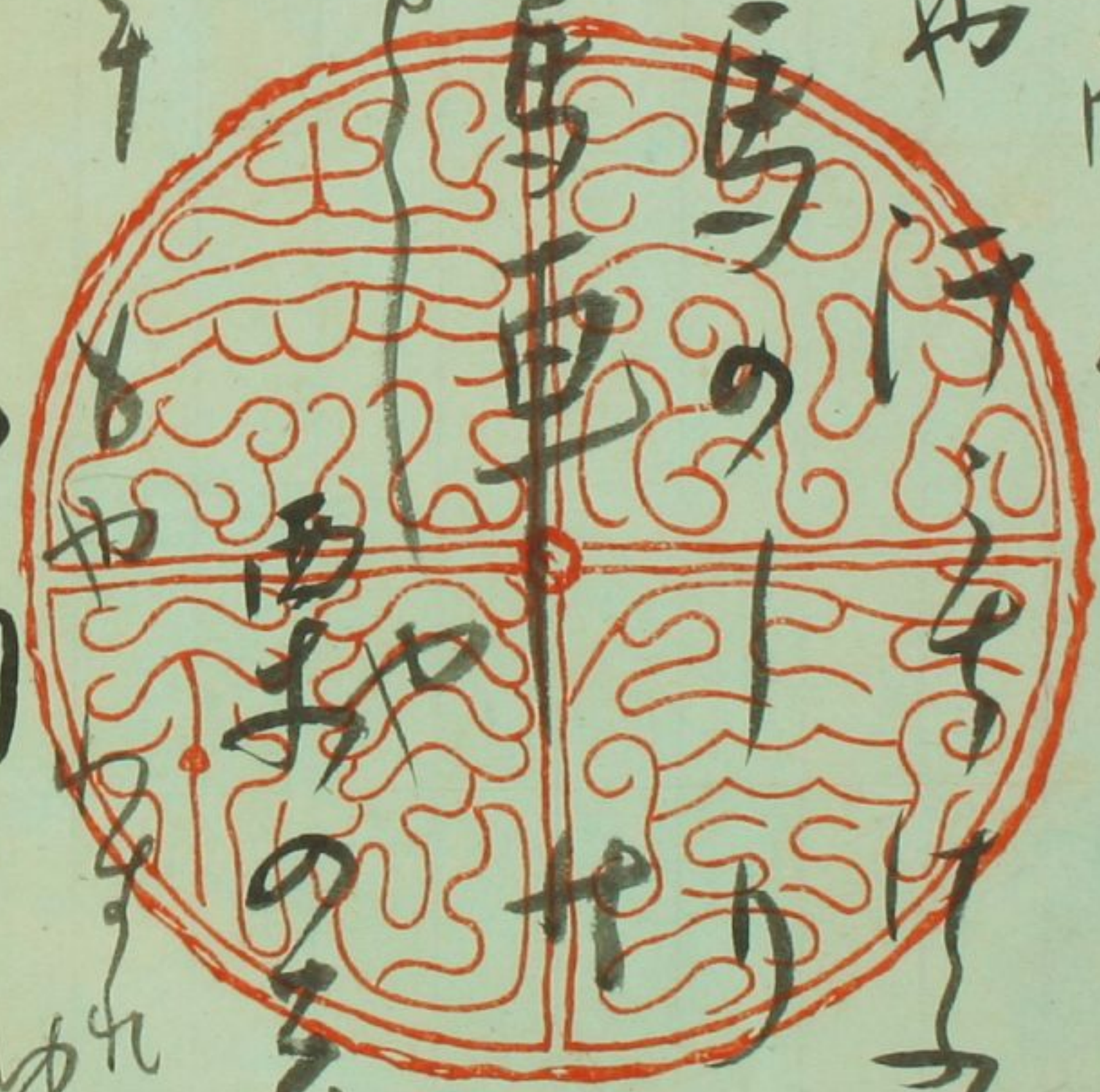
雨のしら

馬車のけり

此子蟲書  
百索  
不蓋秦瓦  
也 黃樹仁記  
錦雲製

麦の穂

山雨か



之れと一固と多量の又そのを説く者迄年未志き  
余の方に来り固の所あり、余も従来程々来す  
の所ありしが、余を一暫日を添ゆることさう、漸  
やくこゝまで運びたり、故に早稲田に備へると  
維持に困難なるも、余もよく今も七早稲田  
の三文字を加へけり、永樂作よりと今も備へると  
永樂作を冠せしもの、早稲田の長き、富ますもの、  
自叙則又早稲田の出身なるも、余も今も備へると  
さう、る見たり、早稲田、恩賜、徳、信りきり、西  
洋も道でえん、日本画の改訂をさす、丑、政  
中、茶、一流の画を多く、危する者あり、特とえん、  
信りきり、さうと中心とせん、他もか、さう、并

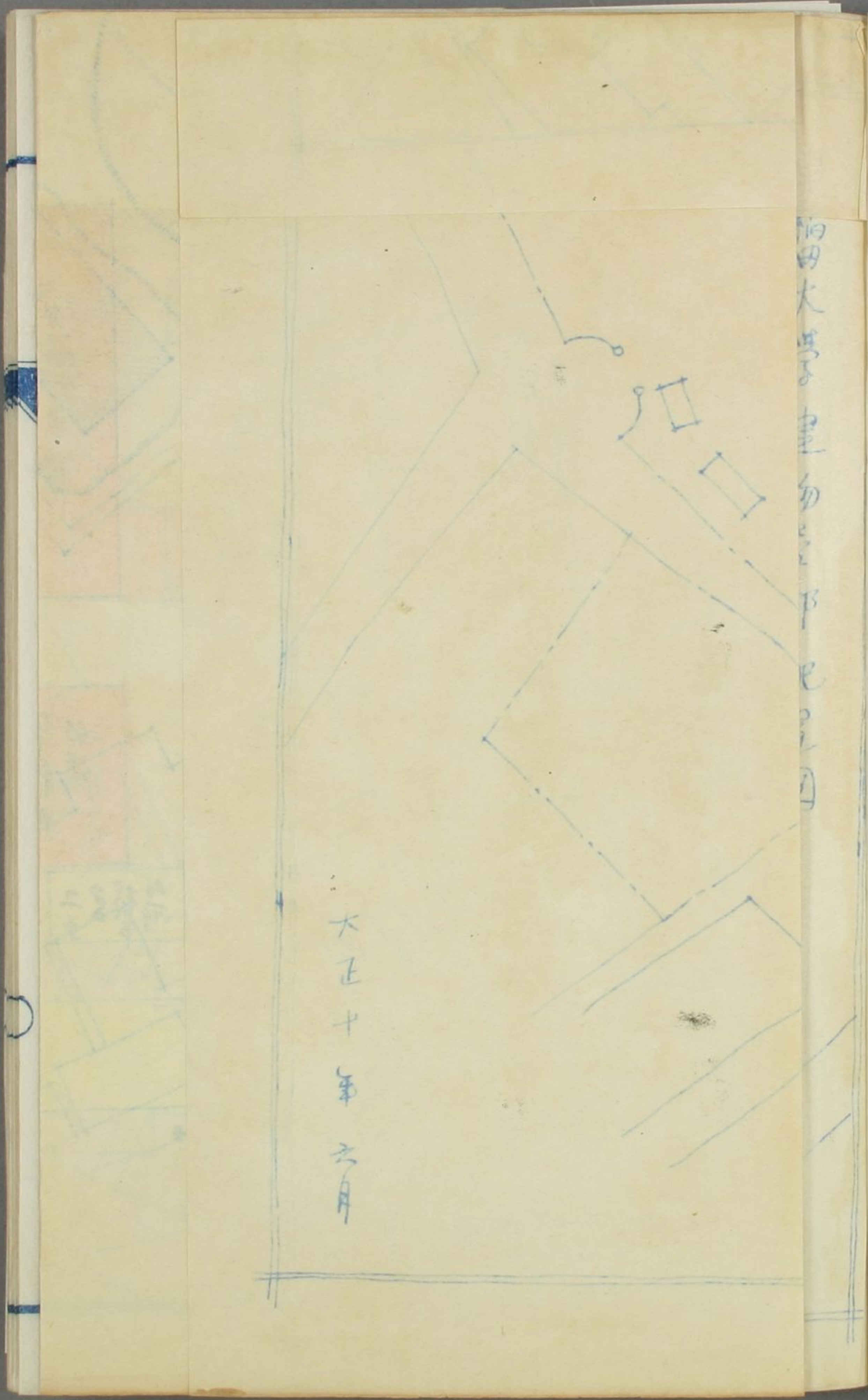
早稲田の海を、松、在、海、列、島、廿七、海、漢、と  
ぬ、す、る、を、評、決、す、  
七月の日記

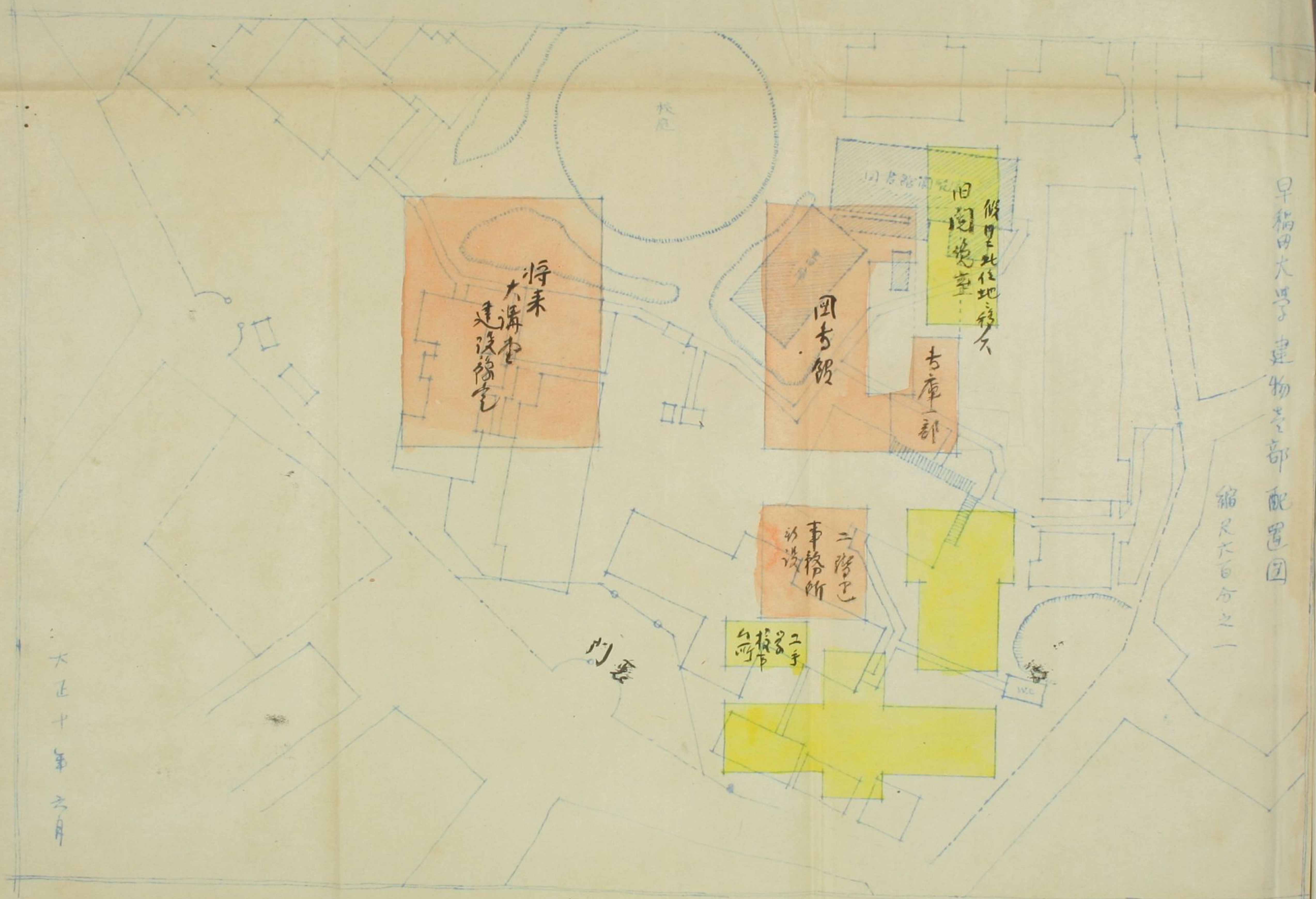
今日の早稲田維持委員会、松、在、島、多、量、を、要、す、  
問題も決議す、曰く固、方、館、建、築、回、り、才、二、部、  
高、が、只、う、院、建、築、回、り、事、務、不、建、築、是、れ、さ、う、  
此の費、款、五、十、萬、圓、に、上、る、固、方、館、の、建、築、才、一、  
期、約、三、十、萬、圓、高、が、只、う、院、の、十、萬、圓、事、  
務、不、建、築、の、附、近、建、築、に、既、有、の、六、萬、圓、也、  
一、固、方、館、建、築、の、件、は、前、回、維、持、員、會、に、  
松、在、院、に、決、す、る、所、あり、唯、此、其、後、設、  
計、上、変、じ、な、る、こと、を、初、め、四、年、の、書、  
庫、を、新、建、築、に、附、加、し、て、存、す、る、云、

ろうし家、日本にあり煉瓦建築を其の  
 移轉する機械あり、且つ之れを移すに  
 甚るる六千圓の経費を要する。其の  
 つぎに宜方潰して其の材料を他の  
 工事に用ゐんことを爲すに四千圓に値する  
 材料とするものつき、之れを存せざるに  
 と俱し其の代り、初案ありて、**四**号庫  
 全部の土合の一を建築するに止むべき  
 所也、今の二を建築するものに改む、又  
 新倉庫 **四**号に之の半を併し其の  
 目を待ちて、新倉庫をこゝに移し、而して後  
 田倉庫を潰すより、其の他は、移すこと

田倉庫の建築を停止せしむ

大正十年 六月





早稲田大学 建物各部配置図

縮尺六百分之一

大正十年六月

此は終らぬ新構の移し而る後旧  
 古庫を潰す事其他の移しに

と但し其代り、初案の圖書部  
 全部の中分り一と建築するに

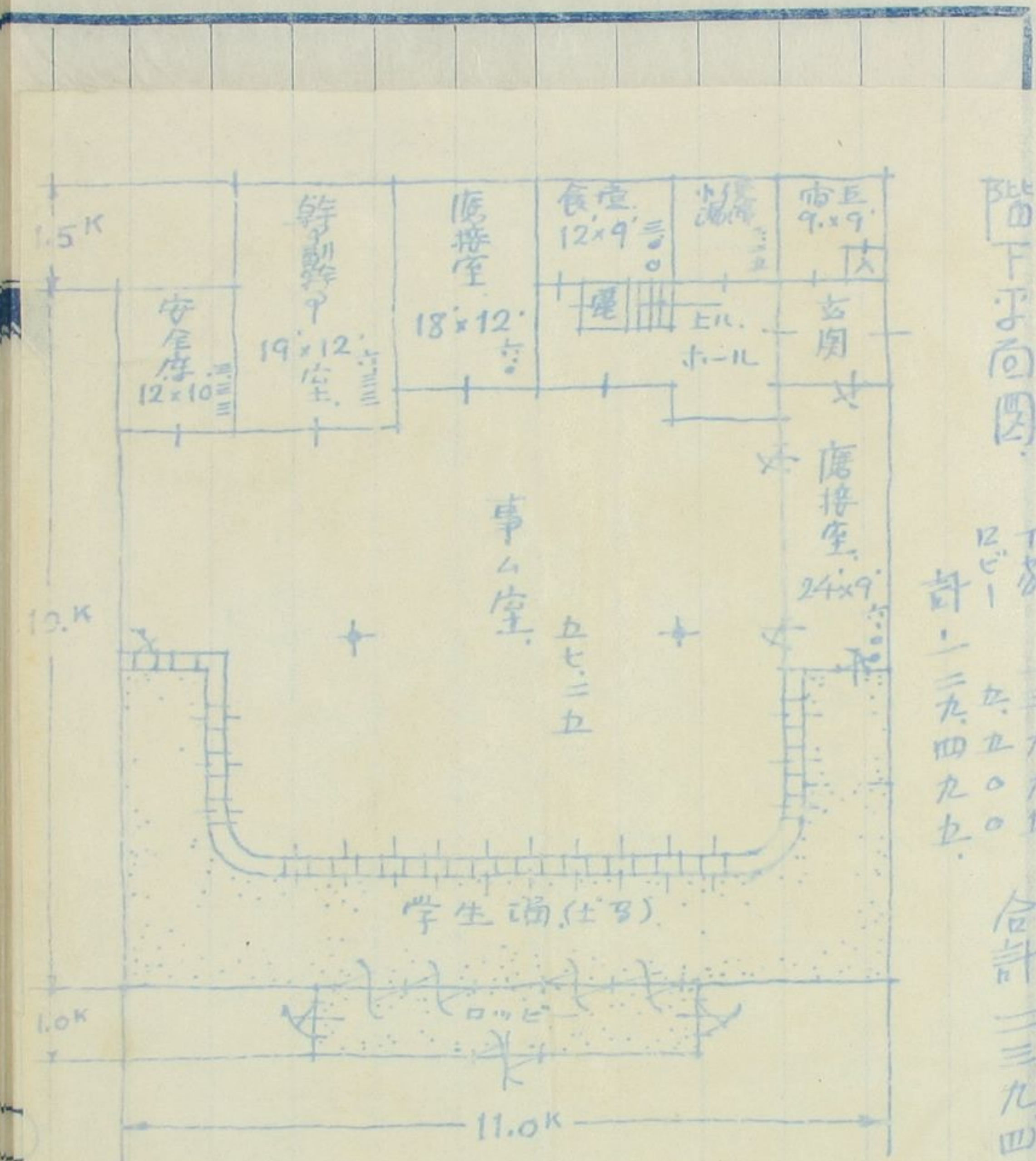
ろくし家、日本にあり煉瓦建築を其の  
修繕する機械あり、且つ之れを福生に

夏更し

一才二部高等学院は是れ去年四月  
に建設を要す、差あり七五十八と収  
容し得るを論ずるを要し、三階建  
総坪数九百餘坪、鉄筋コンクリート  
トラス一坪二万六千、総計十二万六千  
円設備費若干、此の建築を本  
校と運動場の中間の校舎地を  
立し、一階を為すこと才一高等学院  
の如くす、此建築費をある人の修入  
金とせしむる、石及び土を差印し  
て償却するものなり





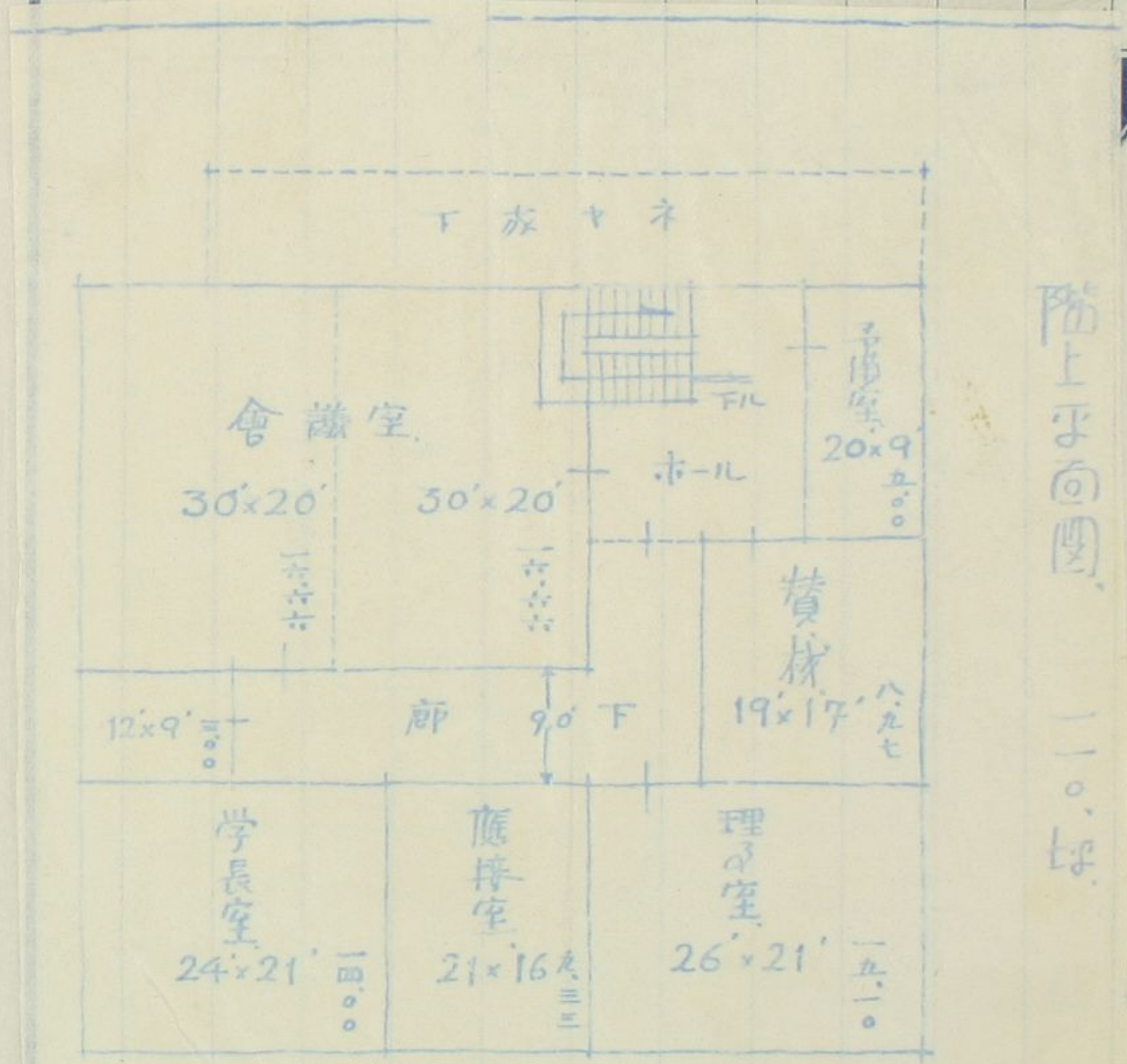


階下平面図

本館 一、七〇〇  
 下敷 三、九〇〇  
 計 二、九四九  
 合計 二、三九九

昭和十一年七月

事務不図



階上平面図

一、〇〇〇

一 従来の事務と大津市内教員を二海  
津市務用の何教員に十八人、今を狭  
くして事務一人を増加する。後序  
多く別居持法を必要とする。新築を  
右図の如く二階建て。地下室と暖房  
のボイラー室を設け、此の建築をせし  
ト、アロウクを心を保持約二万円に  
総算する。此資金は七分通り充て  
き金あり、位互に別居の如く用を  
とおろし、裏つに此へ。此をのり  
末二門とする。請乞

右事務所新築の效果として、事務の整理の至る後

大津市の如くありしもの、兼て客をも事務を備へり  
あるところ、大津市階下全部を教員用と充  
て得へし、教員に別する感傷上、教員を改  
善しおありし格好をとりしとす。設計を七  
此の計画と目的に為すべくしと余も此の計画を  
す。六 従来の事務不とを生活用の所見とする。南  
る者の意向するし。七 此の意向を教員に格不とあ  
せし。且つその格好の如く事務を教員に充て  
遠く事務をらんじ格好を教員に充て事務を  
四事務不と格好、教員をくして不使する。く  
しとせん余の提議)

以上の大津市の図を設け、二十年の連続する事務を

のの皆来年四月迄の海成務定のものなり、其書を  
事定上九月迄に文送し塩沼の長と首領より此  
書の内容の事等を塩沼純任の首領よりさし、此の  
ころのころ何事か又みかと其書を取難しとする事  
ありしが、似れ改定定より其親書を首領が別ち送  
りし事あり、塩沼の内各に別し、そのころに松平の  
里中(澤村不在とさる)のころに澤村の海成の  
助何事佐長の然る事かものころ、若し何事かの  
塩沼の代に塩沼純任の首領を要するもの記を成め  
何事か取難し事ありと感するもの  
多し、其も塩沼の純任一年のころに里中(澤村)の  
内約七十年の、一年の事かをさると得んは其書

を其書にさし、其書ありと此書に内部に内側の  
生七十年のことあり

七月の記





○偶々救急本州を踏ぬ救急野湯二冊附録と  
 して添野湯の聖薬の語也、杉山玄遠の序あり  
 此序海舟の何首烏を採りて圓上て左の記  
 るなり

何首烏 食根

昔有何翁服之白髮反再烏ハク双瞳炯々  
 後人采根食之可以濟飢

何首烏分双眸碧、我未衰分髮先白、  
 飢餓相莫愁緒多、首烏秦飢還秦病、  
 猶得還童除却老、爭似濟荒切更好。

○印人蓋田考遠歿後遺名姓は坊舎に出で、余曰裏に二三  
法を傳へ、今の又其の遺愛の印譜 行と稱ふは皆  
未だ架かり、無き者多し

一 勤方印譜 十四冊

こゝ考遠先代の家系に係る十四冊  
あつたうれし 勤方と其の父考  
遠の親父天保三方の人

一 吉本園印譜 五冊

吉本のつとむ幕府の木工うゝて派  
臺と心とを業とすかろく呼ぶて御書  
屋日景順と云ふ、景順姓吉本名ハ  
大忠と稱彦左とあり高其其父ハ人  
也明治七年 梨園表流雅譜と

我刻すぬの家跡と云、余初め此  
人の刻と云ふ、在るもの多し、あの  
記及多あり刻と稱ふこと、名家の  
為め、心もこの譜中と云ふ多し、寛  
政十一年十一月止る歿すと云ふ

一 石谷 谷 山房花印譜 四冊

河田石谷の花印の形をのりて  
かき名印 花印 高き、此譜  
机上の珠と云ふもの也

一 江蕙山房花印譜 二冊

こゝ又め吉本の印とぬむ、前譜と次  
き賞玩すべし

一 秋水の印譜

四冊

余改に一部を有るを北印譜の原形の儘に及ひて重複を去るべし

外に日本國を教と雖も延喜の改正と刻しあると板元林氏玄爾とありて前の版亦やう京師回(元禄十二重版)と板元同じ、こん元禄版を延喜二重の年譜より改刻したること疑ふ即ち元禄版と見らるべきものなり

再記 秋の印譜合の獲るものも前に獲たるものも 対照するに前に獲たるもの二冊目終り入上巻終とあり四冊目終り

下巻終と刻しあるの後序前巻に於て行体におしあり後巻は於ては隸体におしあり、こんおあるのよにて他こそ異らざるを、亦二巻の間に優劣ありあるを見ず、益田をとりて男所の印と香蓮の印あり、男所は代りて益田家の花と見えたり

一 時の大隈邸に傳の文の場合を余話合をつとむれば、其の書ある三十ヶ文大也改と文湯しなり、あり目かつ男とせしが、別とみる暇を第一後巻に臨みたる折の行々の活字二枚をこゝに記す一二

を以て、白伊二番王に謁見の旨を、  
二王何れも、  
響の頼らざるに違はざるを、  
伊帝も、  
我皇の字の御のふに、  
盛儀を、  
四  
然、  
ハ、  
時、  
以、  
如、  
多、  
丁、  
べ、  
醒、

可らず、  
若、  
し、  
獨、  
う、  
の、  
あ、  
う、  
と、  
其、  
其、  
償、  
う、



決して意を動かさず、何んともいふ大塚のオチのちを勘定し、  
ハ獨りて肥す所以をいふ也。獨りて日の開きを以て  
皇と稱するものも、トて家畜を取り上げらるる  
こと也。こゝん人をも以ていひ得可らば、生活に  
此欠乏を言ふに容易なるも、若くは也。獨りての  
本邦、長くそのあふちの回く農士を曰く、世帯  
農心も日本の如く畦畔と以て畑地を以て意  
を施し之を溝口を回らすとの奨励を以て行は  
る。世帯の操をも概し、示さんとする者れん  
る。ハサレるらんも何細くもいふ柄の目貫の  
世帯も、靴に我の剣の鞘もある位つて、下々情  
を通すもあらず、抜き放つて、いんが柄に接してハビキ

也。あつ。剣の中、中央に溝あり、するして刀室を運ぶ  
善也。サレハ、この如く、先て映して、燦々として、  
一見、舌に直つ味も、芝の、ゆ路米圓、三定り地位  
る、梅の、友人、と日本の、こりタリスムを、難を  
る、折、冬、と大要と、その後、曰く、日本の、こり  
タリスムを、獨りて之を、いへ、し、め、し、の、防衛上、と、  
じ、ち、を、得、る、こと、也、出づ、獨り、市、の、日記、を、いへ、し、  
らん、らん、の、を、いへ、し、獨り、市、の、日本、と、  
の、早く、決し、居る、こと、搭、ふ、こと、也、日、治、の、  
松、獨り、の、内、と、支、那、を、搭、け、た、る、日、夜、の、  
一、七、六、の、今、次、の、大、義、に、松、を、若、し、不、  
佛、四、收、ん、し、る、も、相、と、去、り、を、侵、し、其、人の

まま志を徹せんといふ事をしてしるる  
 日本のごとくありたいと云ふ事と云ふ事  
 の後多しありて後解しては中しと  
 月十日記

○此後後得て於本牧之るりて  
 意をもろくおぼしき事ありて  
 為故の字をいふに此紙は  
 今と同日中此利七方とありと  
 こゝの國七ありてこゝにおお

七月十日





○七月十日初を令津八朝の七を幼むるの故も  
 洛東山牧之のころを令津八朝の七を幼むるの故も  
 狂歌をよしける狂母を以てす、余のわらわ物之  
 のあはれに思ふくは、お前を道とを花やう七令  
 り無し、此のうた紙雪譜を授ふお物此の贈  
 余のあはれに思ふくは、お前を道とを花やう七令

母の因に深きあはれあまの湖と七才

三才一のうたをよむ

こゝれ牧之の歌、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 臨み、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 の例也、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 鴨川字宮伴二八十三(一)とまゝの人

こゝれ余のうた紙、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 する、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 ける、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 二在位する、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 とあると見え、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 おし、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 来る、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 而、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、

○玉鐸のうた紙、擬山園帖十帖、お前を幼むるの故も、  
 徳へ、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 七終に、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、  
 稀る、お前を幼むるの故も、お前を幼むるの故も、

之れを得たりと云ふ文求むの意らしきありしものと  
三ノ表紙の顔紙を以て推すも、朝野群臣の  
七のと思つる、初振と云ふ思ひんを、面目古と云  
ひ、雅俗愛す。此帖王鐸の臨むと云  
碑誌詩文をて其の古各體あり七古の  
豊高也、少来王鐸の古帖我邦に未だ  
七の古と云ふ、一と真偽お半、いし人多く元  
捺、其し、此墨帖試筆と云ふ、  
得べし、巻尾に三叙あり、(七月十日録)  
○文政五年官版として刻せられたる多くの回中、  
高似詠の硯、四巻、宋の晁以道の墨譜、二巻、二  
種合一冊、本官版目録中に見ゆ、云々、坊間

出でたるもの多、余先年、硯を幾人に見し物  
も久し、而して今漸やく獲たり、硯交、硯、  
する考、流傳文等を幾人と、兼て、  
と併せ、文房中、劇く可らず、(七月十日録)  
○根岸武香所蔵の田春三枚を、模刻し、  
精入る、上代田春の標本と、  
と云ふ、  
し

根岸武香の、ひめと、  
かとの、  
三、  
三、  
三、

のうしえいつたゆはふきつた此由是かき  
たのえりしなることしむは又たそのことよて  
あこと見らふきつたのうし保人保長保子  
徴部領款り書税領りしこととさ  
そ見届ことかく免つらうこととさ  
おにやきひらおてらうこととさ  
廿二のうし一免んこととさ  
わしとあつたこととさ

明治廿三年一月 早田主頼

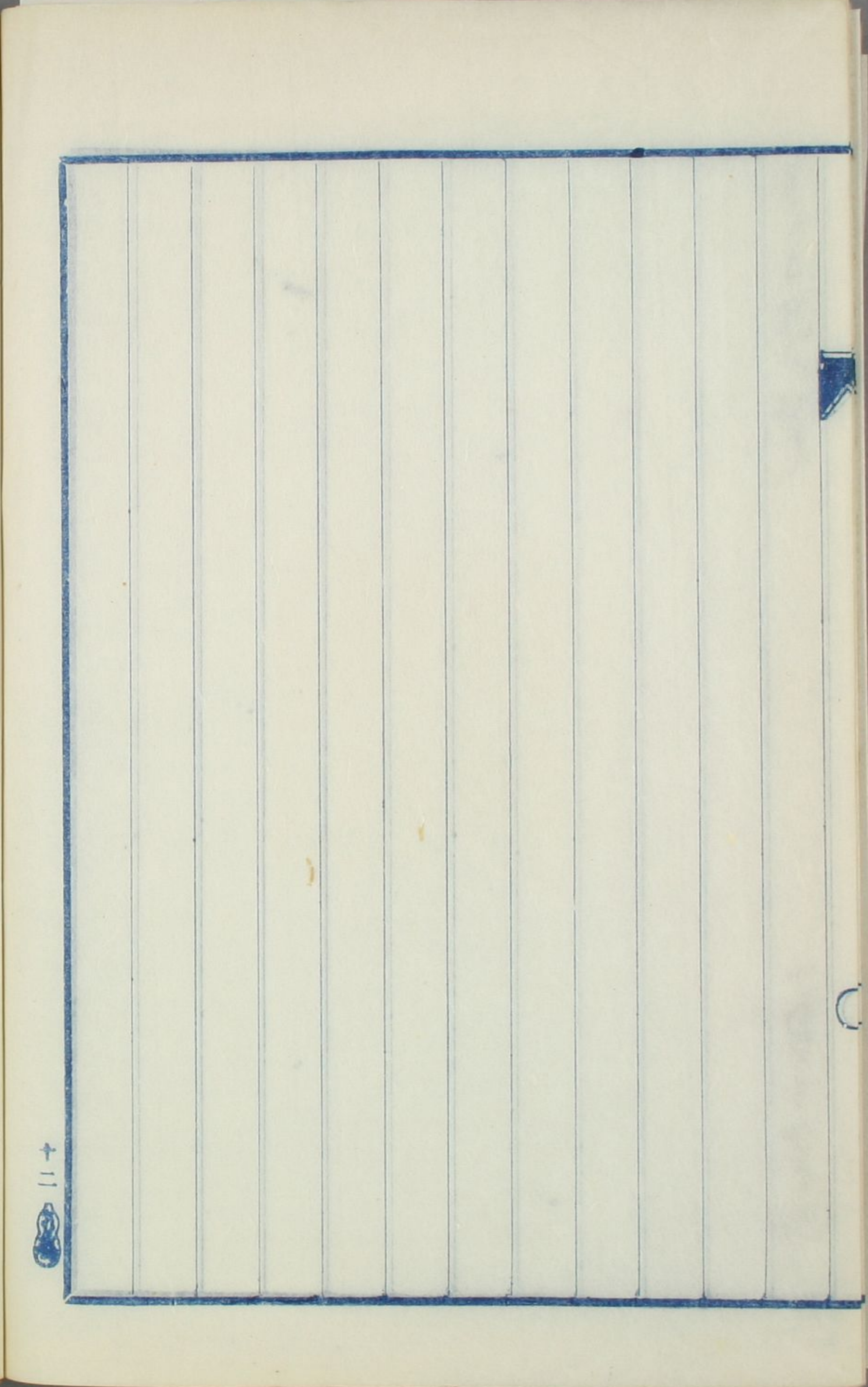
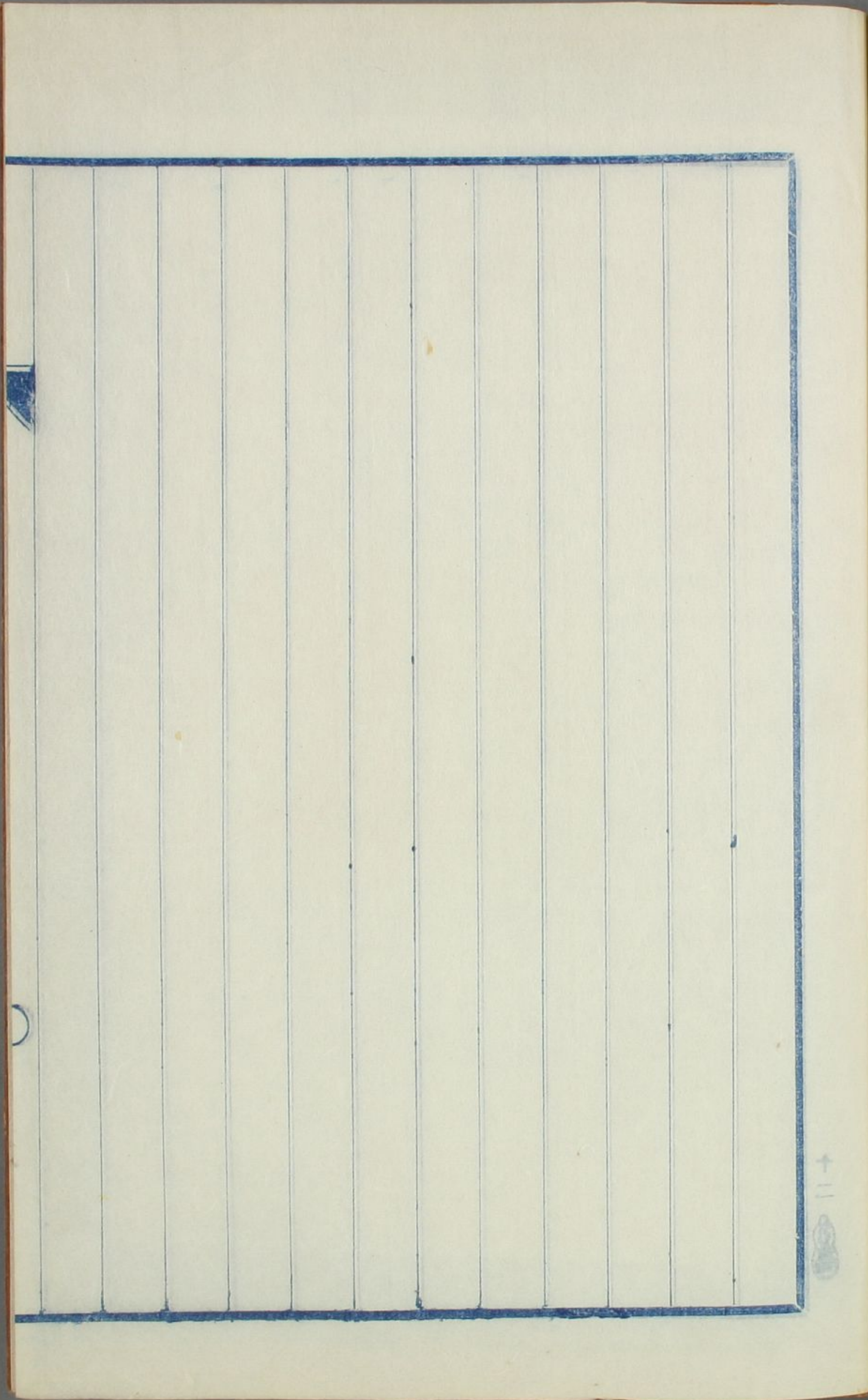
○北銅印足利郡雞足寺に在する所、此本  
其のそのその、此寺の大田年方の創也、傳

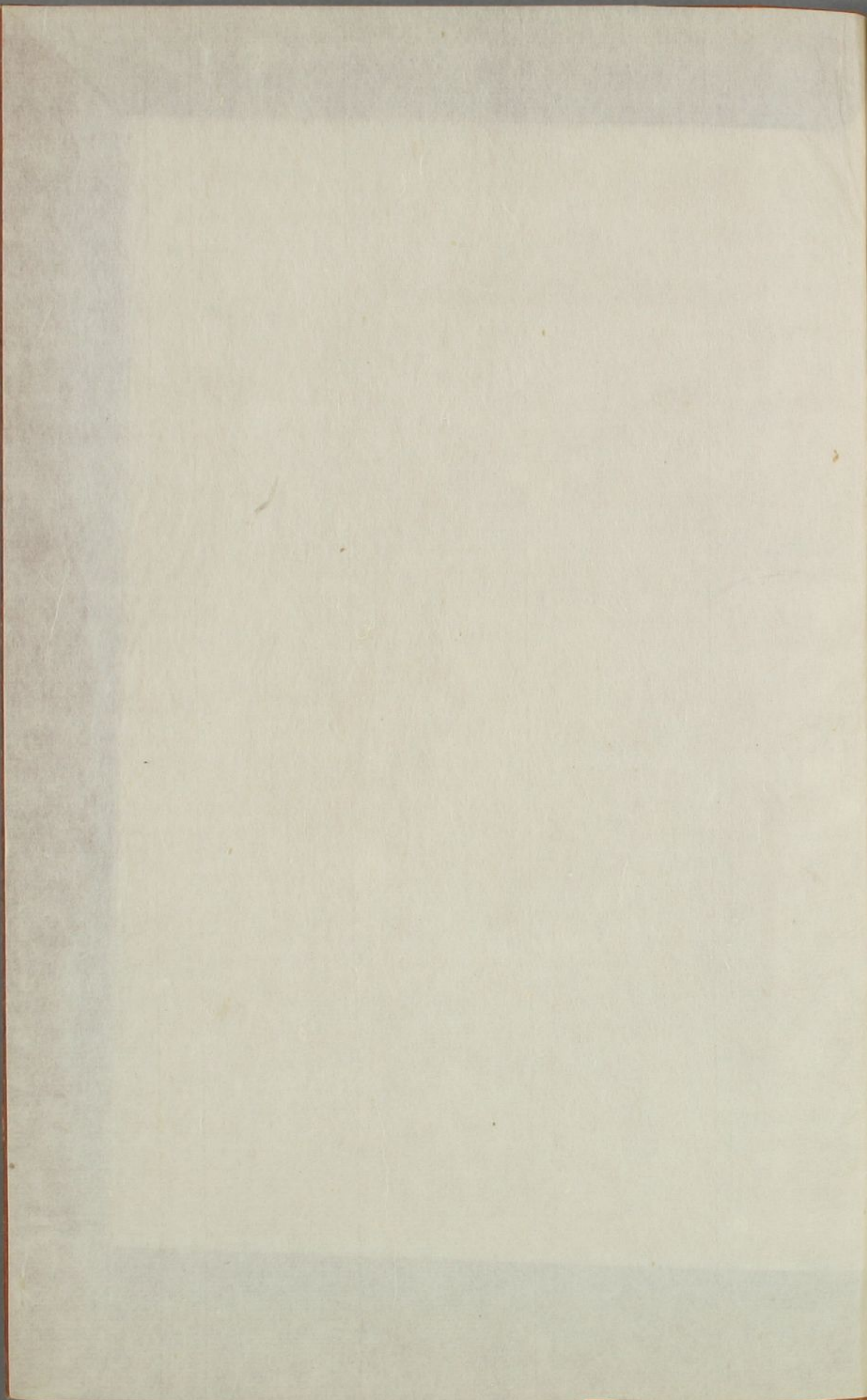
の苦熱を冒して浦邊兼夫の場を絹本四枚を  
押さむ程する不業根源中し終る用あり不  
の墨梅仙物兼業と得る軒し兼業墨畫政  
て在る事とせし但れを杜をそふ事  
漸やく熟す心領家おとくやんく(七月十日記  
○海内男出来各種の論語を婚の余り、  
の毛坊にえたる公平論語七男のあり、  
此の文にいと優ある也、偶し、  
産ありと後す、  
し終る他人のあり、  
其論語の詳をやく、  
の四面在る地云この

の器名ありしと、  
う價二る同、  
往むと余り、  
市なる暑氣大い、  
多敷の花を、  
この見、  
○外海中し、  
の器を扱く、  
力十カ月、  
織章あり、  
兼子を感、  
并し得ず、









--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--



